

がん相談対話外来・病理相談外来（セカンドオピニオン）について

目的

当院はじめ各施設で行われているセカンドオピニオン外来の多くは、医師 vs 患者・家族による外来で、患者からの相談に対して、医師からの一方的な説明になることが多かった。

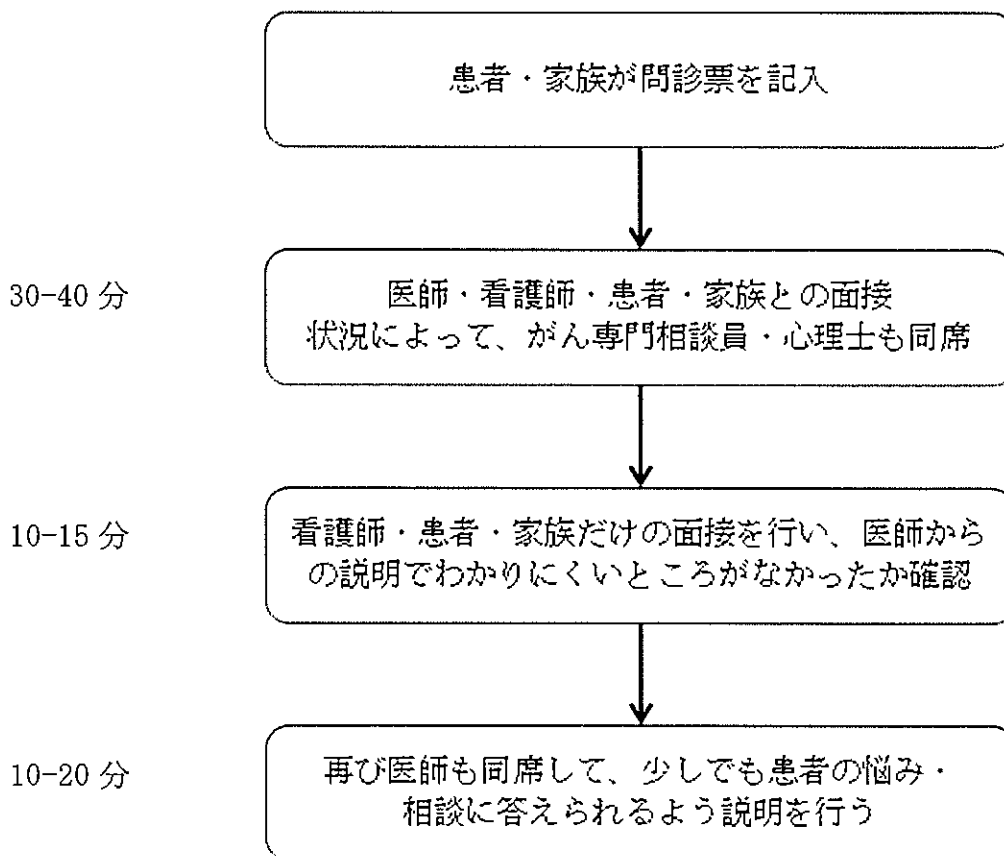
患者の悩みを十分に聞き出すためには、医師 vs 患者・家族だけでは不十分で、患者が質問しやすい環境をつくり、医師・看護師・心理士・がん専門相談員など様々な専門家が来て今後の治療について、患者と一緒に考えて行く必要があると考えられる。

がん相談対話外来では、医師・看護師の面接・相談外来を行った後に、ベテランの看護師との面接の時間ももうけ、患者の悩みを引き出し、必要によってもう一度医師からの説明を行うなどの工夫をすることにより、患者からの相談に応えることを目的とする。

内容

がん相談対話外来の流れ

- (1) 受診手続き後問診票を記入する
- (2) 医師・看護師・患者・家族との面接・相談外来を行う。必要な場合には、がん専門相談員も同席して 30-40分かけて、医師と看護師が説明を行う。
- (3) 最初の相談後、医師に聞けない悩みやわかりにくい説明が無かったか、看護師だけとの面接を行い、必要に応じて再び医師・看護師・がん専門相談員が説明を行う。



受診した患者への対応

「がん難民」という言葉は、がんが進行し治癒を目指した積極的な医療が受けられなくなったとき、患者の方々が主治医から見捨てられたと感じるときに使われることが多い言葉で、その一方で、患者の方々と医療従事者とのコミュニケーションや情報共有の不足も原因の一つと考えられます。がん相談対話外来を受診する患者を治療の側面から分類すると以下のふたつに大きく分けられます。

- ① 実際に有効な治療法はあるが、情報等が不足していることにより適切な医療を受けることができていない患者
- ② 様々な治療を受けて、これ以上の手術・放射線・薬物療法の効果が期待できない患者

①については、当院を受診することが、今後の積極的な治療につながりますので、主治医のもとでの治療・当院での治療を行うよう説明します。現在の主治医のもとで治療が受けられず、当院から遠い場合には、最寄りのがん拠点病院を紹介します。

②の患者については、これまでの治療をふりかえり、主治医が行っている医療が適切なものであるならば、主治医と今後の治療や緩和ケアについてさらに話し合っていくよう十分説明します。また、今後予想されることや対処法・緩和ケアの過ごし方・介護保険・社会福祉制度についても説明します。当院には、精神腫瘍科というがん患者の心のケアを行う精神科外来がありますので、当院でのがん治療を行っていなくても、精神的ケアをうけることができます。

患者からの電話相談・電話予約

予約初日に 100 件以上の相談（通常の 2 倍以上）

予約センターで対応できない内容は、相談支援センターでがん専門相談員が対応。

7 月中はほぼ予約済みで、8 月半ばまで予約が入っている。

現在 1 日 8 件にしている予約件数を今後増やしていく予定。

がん相談対話外来の実際

4 日間で 23 件の相談対話外来を実施。7 件が終末期医療（ターミナルケア）、16 件が現在の治療でいかどうかの相談。当院で治療を行うことになったのは 1 例のみで、対応医師の説明を聞いて、納得して現在の医師のもとで治療を継続することになった。

(1)終末期医療に対する対応例

- 主治医の説明が不十分と思われ不信感をもって来院したが、当院医師の意見をきき、これまでの治療がてきせつであったという説明を聞いて、安心して現在の医師のもとで治療することになった。
- 全身転移で治療法がないと言われていたが、骨転移に対する疼痛緩和の方法として麻薬鎮痛剤だけでなく、症状緩和のための放射線治療があることを説明。
- 介護保険やホスピスについての情報提供が不十分であったが、当院のがん専門相談員からの情報提供をうけた。
- 地方に住む患者の都内の緩和ケア施設への転院について、がん専門相談員が転院先を探した。
- 地方に住む親の治療について、都内に住む家族が相談に訪れ、納得して地方で治療を継続することとした。
- 現在の状況が本当に終末期なのか、説明をきいて納得した。
- 経済問題や在宅介護については、医師よりも看護師やがん専門相談員(SW)の方が相談しやすいという意見あり。
- 看護師と面談することができてよかったという意見が多く寄せられた。

(2)現在の主治医に対する治療の相談

- 主治医から手術を進められているが、説明をきいて、現在の主治医のもとで手術をうけることを決意。
- 手術と化学療法あるいはサプリメントのどちらの治療がいいのか、当院をはじめとする臨床試験結果をもとに、科学的に説明することで、積極的に治療を受ける気になった。

患者への説明を十分に行うための工夫

- (1) 対応する医師・看護師は、コミュニケーションスキルを専門とする医師・心理士の講義を全員が受講した。
- (2) 外来後患者・医師・看護師へのアンケートを行い、Tumor Board というカンファランスを実施し、対応が十分であったか多くの医療スタッフで検討する会を行うことにしている。
- (3) また、コミュニケーションスキルを専門とする心理士も同席し、コミュニケーションが十分であったか、医師・看護師への指導も行うこととしている。
- (4) これまで日本の医療の現場では、コミュニケーション技術について反省する場が少なかったが、この外来を通じて、今後も定期的にコミュニケーションスキルを向上させるプログラムを行っていく予定で。